

旧立川番所書院 2012年9月22日

右城 猛

現在開発中のコンクリート製防護柵の2回目となる自動車衝突実験を、サーキット場「モーターランドたぢかわ」で行う。高知自動車道路笹ヶ峰トンネルの近くにある。

その帰り、「旧立川番所書院」を見学してきた。



立川番所（関所）は、江戸時代参勤交代における土佐最後の宿所であると同時に、国境警備の要衝の一つだった。

大きな茅葺き屋根の番所屋敷は御殿と呼ばれ、今も昔のままに保存され、国の重要文化財に指定されている。寛政年間(1800年頃)の建築で茅葺き寄棟造り。間口8間半、奥行き6間半、藩主宿泊の上段の間も入れると9室ある。面積は212平方メートル。64坪。

明治5年に個人の手になり、一部改装され旅人宿として利用されていたが、昭和48年に町が譲り受け、昭和49年に国の重要文化財に指定された。

しかし建物の傷みが激しく、昭和55年から解体復元工事が行われ、昭和58年に現在の建物が完成している。



殿様の寝所として利用されていた上段の間。

この施設は、日曜日と祝日のみ一般に開放されている。

受付係の女性は、生まれた田舎が同じ本山町古田という杉本康子さん。私の叔母・長崎忠子とは同級生で、私のことや父母のこともよく知っておられた。

私たち以外は入館者が誰もいなかったこともあり、施設を親切に説明して下さいました。



玄関の奥の座敷の書院。書院の裏側は廊下になっていて、障子に映った影絵が実にきれい。



2年前に高知県立美術館で、影絵作家藤城清治の個展「藤城清治の世界展」を見て、あまりもの美しさに驚嘆したことを思い出していた。

【2012年9月22日記】

書院の裏側の廊下。



障子に映った影絵。書院欄間の透かし彫り（切り抜き）を通過した電灯の光が作る影絵の模様と色彩が実にきれいである。

欄間の板の厚さ、欄間と障子との微妙な隙間により、このような見事な影絵ができるのだろう。



家内が座敷の方から障子に手を当てると、やはりきれいな色彩の影絵となった。